

## H29 年度 第 1 回埼玉県言語聴覚士会西部支部研修会 報告

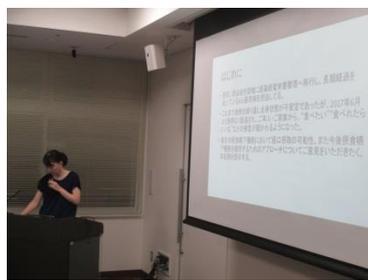
平成 29 年 8 月 8 日、第 1 回西部支部会研修会がウエスタ川越にて開催されました。今回の研修テーマは、「嚥下障害と嚥下圧測定」と題し、防衛医科大学校の谷合信一先生をお招きしての講演と、症例検討を行いました。当日は 14 施設、52 名と非常に多くの参加者にご来場いただきました。

谷合先生の講演では、マンOMETRYを用いた嚥下圧測定について、今日の臨床で行われている訓練手技や代償手段ごとのデータをご提示いただきました。データの読み解き方だけでなく、嚥下圧という側面から訓練手技や代償手段の意義や効果を丁寧にご説明いただき、改めて我々言語聴覚士が提供しているアプローチの意味を実感できる機会となりました。講演後の症例検討では、城南中央病院の山崎裕子氏から「ALS 長期経過例に対する経口摂取可否判断の検討」という題目のもとディスカッションが行われました。個別の機能的評価結果や全身状態、本人家族の思いや職種間連携など、多方面の視点からのディスカッションが行われ、講師の谷合先生からも的確なご助言をいただきました。

次回は 11 月に高次脳機能障害をテーマに開催予定です。皆様のご参加を心よりお待ちしております。



谷合先生 ご講演



山崎氏 症例検討

西部支部理事 大森智裕  
部員 米谷 寛

### 参加報告 大生病院 小林美穂さん

嚥下圧を計測するマンOMETRYは小さな病院ではなかなか触れる機会がなくイメージしづらい物でしたが、今回、症例や文献を交えながらわかりやすく教えていただき勉強になりました。マンOMETRYを用いた嚥下障害の研究はまだ少なく今後進めていく領域とのことで、今後着目していきたいです。

症例検討は ALS 患者様に対する経口摂取の可否判断についてでした。経口摂取の可否判断には日々の臨床の中で私も悩むことが多いです。誤嚥のリスクが高い患者様にも口から食べてほしいと思う反面、命を脅かすことになりかねない経口摂取にトライするのはとても恐く、食べる機会を失っている患者様が沢山います。今回上がった意見の中に「医師や看護師など他職種と協力し、異変に早く気づきすぐさま対応できる環境を整えていれば、経口摂取にトライしてもいいのではないか」というものがあり、私は医療機関に入院している方を対象としている強みをきちんと活かしているのか考えさせられました。患者様に「食べること」を提供できるよう、他職種と協力して環境を整えていくことが大切だと感じました。